

---

# Fiction World

ラド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fiction World

### 【NZワード】

NZ976E

### 【作者名】

ラド

### 【あらすじ】

「世界が、欲しくない？」それが、今までに終わりを、新たな世界の始まりを告げた彼女の、最初の言葉だった。

## Days1 (前書き)

相変わらずの駄文です（汗）

いきなりだけど、こんな事を不意に考えてしまう僕は何者なんだろつか。

「世界征服したいなあ」

それはついさっきクラスの不良共に?『えてもらつた?打撃の痛みによる気の迷いか、その衝撃によつて昨日買い換えたばかりの携帯電話が壊れた事に対する落胆の感情のせいか。

はたまたそんなの関係なく、目の前に体育座りしている見慣れない少女が言つた言葉のせいか。

（数分前）

『世界が、欲しくない?』

そう僕に言つたのは、僕が見たことも会つたことも無い少女だった。所々痛む身体、自分と同じように伸びている不良達。いや、つていふか彼らは死んだんじやないのか?

僕はこの不良達に暴行を食らつた。いわゆるリンチだ、まったく酷い奴らだよ。

そしてその連中が自分を取り囲むようにして、一見死んでいるかの様に倒れている。これはどういう事なんだ?

「うん、これはどういう事なんだ?」

僕は仰向けに倒れたまま口に出して言つて見る。しかしその声は高速道路下の静けさに響くのみで、答えるモノは彼女の再びの『ねえ、世界が、欲しくない?』だけだった。

「はい」とも言えずにまた嫌だとも答えずに立ちあがつた僕。平常心を保とうとするが周りの光景がそれをさせてくれず、微妙に裏返つた声で自分の横に座つたままの少女に問いかけた。

「い、これは、キミ一人で…?」

「うん」

小さく頷いた彼女はすっと立ち上がり、電話交換手並に落ち着いた口調で再び僕に話しかけた。

「ねえ、欲しいの、いらないの？…どっち？」

「き、急にそんな事言われましても…」

小首を傾げて僕を見る少女。長めの黒髪は目にかかりそうな所で綺麗に切り揃えられ、整った顔立ちは白い肌を強調しているような感じだった。

未だに脳内が整理できなかつたのだろう、僕がこの少女の事を？変人？と選定するのはもう少し後の話だ。

「そ、それよりも逃げないとけませんよ、すぐに？大村？達が目を見ますよ！」

とりあえず急ぐはこの場からの緊急離脱、と答えを出した僕は彼女の手を引いてこの場を離れようとしてますが、

「待つて」

「うわっ！」

彼女の手を引く右手に力が入つたかと思つと、僕の視界は上方向に反転。彼女に引き倒される形になつて地面に再び仰向けに倒れたのだった。

「痛いですよ：何するんですか！？」

打撲した後頭部をさすりながら上半身だけを起こして苦痛に顔を歪める僕。しかし彼女はそんな事にもお構い無しで、

「はつきりしてよ。このままじゃ私、あなたを殺さなくちゃいけないの」

「…？」

刹那、止まる思考回路。

『二、殺す？』

動き出した。

「ちょ、ちょっと待つてくださいよ！なんで僕が！？」

「だって、私の事を知っちゃつたもの」

「知らないですよ何も！いいからこの手を放してください！」

僕は全力で彼女の手を解こうとする。今更だが、自分から握つてしまつた事を後悔したのは言うまでもない。

「ダメ、早く答えを出して。」のままじや彼らが目を覚ました。「わ

駄々をこねる子供を叱る母親のように下から上目使いで僕を見る彼女。そして彼女がそう言った矢先、うめき声がどこからともなく響いた。

「痛いな…コラ吉岡ア…てめえよくも…！」

上半身を起して鬼のような形相をした大村が、まさしく悪鬼のごとく怒り狂いながら立ち上がり、僕の傍らに座った少女を見るなり大きく後ずさりした。

「そういえばコイツ…俺たちを一瞬で…？」

よく覚えていないのか、納得のいかない表情のままの大村はすぐにでも逃げ出せしそうな感じだったが、そう簡単にもいかないんでしょう。

「お、大村クン…今日はこの辺りにしておきませんか…？」これ以上の暴行はお互いに喜ばしくないと存じますが…」

そもそもどうして僕は彼らに恨まれるのだろうか、人に恨まれる様な行動を取った覚えはないのだけど。

しかしそう怒声を上げる大内。

「うつるせえ！その敬語が気に食わないんだよ！人を馬鹿にした様な話しかけしゃがって！」

「ば、馬鹿になんかしてませんよ？一種の尊敬じゃないですか、ホラ、文字通りじゃないですか」

嘘です。

「それが馬鹿にしてるひんだよ！ああお前と話してると本当にイラつく！」

僕はいつの間にか、傍らの少女の存在を忘れ、震える声を必死に抑えつつ、言葉の反撃を放つ。

「い、この口調は物心付いた頃からの癖なんですよ…癖を治せと言

われましても、そんな容易な事じやありませんよ？」

一瞬怯んだ大村、その隙を突いたかの様に、黙視していた少女が不意に僕の耳元で囁いた。

「彼は邪魔な物を整理する時に、辞典のケースの中に詰め込む癖が「そ、そんな癖があるんですねか！？」

「な！？」（大村）

何かしら大きな過ちを犯してしまった事に気づく僕。

「って何言わせるんですか！？」

「あなたが言った事じゃない」

冷やかな目で僕を見る彼女に対し、本当に怖いのはこの人だと僕は思った。

「それで？私も急いでるんだけど」

いつの間にか立ち上がった少女は、視線を虚空に向けたまま僕に問い合わせた。

この時僕は、彼女が自分よりも遙かに身長が短い事に気付いたが、今はそれどころでは無かった。

大村の仲間たちが氣絶状態から回復し事態と現状を把握、すぐさまバトルモードに展開してしまった。

「こいつ、ツレがいやがつたのか！」

「痛い…まだ頭がズキズキするぜ」

所々から痛々しいめき声が聞こえる中、僕の顔は青りんごの様に青ざめ、大村は本気の様子。

「どうするの？私の予測結果によれば、あなたは30分後に市民病院の治療室にいるわ」

「そんな殺生な！」

平然と言う彼女。だがその瞳はまるで『早く私の言つ通りにして』と訴えているかのようで。

「そ、そんな…」

この時の僕は、とにかく自分の安全を確保することを最優先に選択してしまったから。

「わ、わかりました！もうなんでもしますから…」この場を切り抜けられるならやつてみてくださいよ！」

この言葉が後々僕の人生をエッフェル塔の「J」とく傾けて行くとは、想像もしなかったのだ。

次の瞬間、少女は機械のように無感情な声質で、押し流すように僕に話しかけた。

「コードN-01。契約内容を確認、あなたは『CWC』の規約に則り、私、『ウォーミルナ』の権限において当機関に所属する事を認めます」

一気に言われたその言葉を、僕はよく聞き取れなかつた。

「コードN-02。あなたは『SSエ』の所属に伴い、有事の際は当機関に拘束される事を同意しますか？」

しかし何かの同意書を読み上げる様に淡々と言い続ける彼女。その間にも僕の目の前には大村達が立ちはだかっていた。

「吉岡、覚悟はできてんだろうな…」

大村は持前の睨みを最大限に使用して僕を脅した。そして脅しとは自分で分かつていてもそれはクリティカルヒット。

「ちょ、さつきから何言つてるんですか！？もう彼達も？限界？が来てるようですよ…」

しかし彼女は一步も動かず、

「答えて。同意するの？」

「ええ！します！」

「最後に、コードN-03。あなたは大晦日は裏番組派？」

「それって関係あるんですか？」

彼女は無表情のまま僕を見る。もうとりあえず答えなくてはいけないようだ。

「はい！どちらかといえど裏ですが！？」

「おい吉岡！さつきから何言つてやがる！…そろそろその減ららず口、潰してやるよ…」

大股で近づいてくる大村。僕の発汗の9割は冷や汗で内訳が付き、

足がガクガクと震えたその瞬間。

彼女の凛とした声だけが、異様に大きく僕の耳に届いた。

「わかったわ。」「一ドノ〇五九。末梢措置を行使します。危ないから、下がつて」

最後の言葉は、微妙に笑いが含まれているようにも思えたが、僕はそんな事よりも目の前の光景に意識の全てが持つて行かれた。

次の瞬間、ラジコンのモーターが動く様な駆動音が一鳴りしたかと思つた刹那、金属同士がぶつかり合う音を立てて彼女の右腕が肘から縦に四つに割れ、花が開いた様なその腕から勢いよく飛び出したのはまるで戦闘機に付いている噴射口のような円筒。

次に倍の大きさと長さになつた右腕を軽々と持ち上げた彼女は、その近未来的な光沢を見せる大砲の様な腕を大内に向かた。

一斉に止まる大村達の歩み。僕は若干だが、彼女の後ろで嫌な予感を感じていた。

「な、なんだコイツ…」

驚きを顔に出して一步引く大内、同じく彼の倍は後ろに下がつた大内の仲間。

そして飛び立つ戦闘機の様な爆音を上げ始めた彼女の右腕は目がかしくなる程の閃光を発した。

それが何故だろう、次の瞬間僕は自分でも納得の行かない行動を取つていた。

なんというだらうか、？死ぬ予感？なのではなく、？殺す予感？がしたのだらう、多分。

「それはだめだつて！」

そして氣づくと僕は無我夢中になつて彼女を押し倒していた。

しかし彼女の腕から発射された？光線？は大村達の方向に、だけど僕の行動が間一髪を引き起こしたのか、深紅の？光線？は僅かに大村達から逸れ、大村の後方にあつた資材置き場に直撃した。

熱風と共に地を搖るがす程の爆音が高速道路下の静けさに響いた。

僕は瞬時に取つた行動が大村を助ける為ではなく、単に人が死ぬの

を見たくなかつたというのが原因だとは気付かなかつたが、以外にも彼女の鋭い視線が心臓の鼓動を早めた。

「何で邪魔をするの？あなたが頼んだ事じやない」

「こ、殺せとは言つてませんよ！」

僕は、木材があつたのだろう、火が噴き出し始めた資材置き場と睨みながら感情の籠つてない声を発する彼女の方とを交互に見ながら言った。

「…ば、化け物！？」

大内は腰を抜かしてその場に膝を付いていた。

とつくに逃げたのか、大村の仲間たちの姿は無い。

「た、助けてくれ！」

彼女を見るでも僕を見るでもなく、蠅を追うような目つきで大内は叫んだ。

しかし無情な事に、彼女は僕と大内のどちらにも耳を貸す事は無く、「あなたは黙つていて、命令は絶対なのに…」

と理不尽な文句を言いつつ、右手の？鉄の塊？を大村に向けた。そして数秒の間も無く、彼女の右腕からは真っ赤に染まった？光線？が射出された。

「そんなん…」

思わず目を覆いたくなるような閃光とその光景に、僕は息が止まりそうになつた、そして止まつた。息じゃなくて、彼女の出した？光線？が。

「え？」

疑問に思つたのもつかの間。僕の視界の端に立つていた彼女は後方に大きく跳躍。

次の瞬間爆ぜる彼女の立つていた場所のアスファルト。

僕の視線は後ろに跳んだ彼女に向ければいいのか、大村の安否を確かめるために前方に向ければいいのか分らなくなつていた。しかしそれは強制的に後者の選択へとなつてしまつた。

何故なら大村の目の前には、まるで大村をかばう様にして片膝を着

いた男が背中を焦がしながら片膝を付いていたから。

僕は瞬時に理解した。

彼女の光線は？止まつた？のでは無く、？止められた？という事実に。

「なたは…グラディウス？」

僕の判断では大村以上に彼女も危なかつたのだと思つ。

それは彼女のさつきまでいた場所に大人一人が入つてしまいそうち程大きな陥没があつたから。

しかし彼女は落ち着き払つた口調で、そのデンジャーな防衛術を果たした謎の男に言つた。

「あなた、なんでこんな所にいるの？」

男は首だけを彼女の方に向け、胴体は訳が分からずキヨトンとした大村の方に向けながら、彼女と似たような冷静な口調で答えた。

「状況が変わつたんだ。オーナーの代わりを探していてね」

そう言つて大村の方に向き直り、片膝を着いたまま大内の右手を握めるように両手で持ち、

そう、まるで王に忠誠を誓う家臣のような仕草をとつた。  
まるで状況が把握できない大村は声も出せずに男の下げられた頭を茫然と見つめるのみ。

そして優しさを籠めた声で、大村に囁いた。

「我が主、御迎えに上がりました」

「ルール違反よグラディウス、ちゃんと規約を読みなさい」

いつの間にか立ち上がりつて僕の真横まで来ていた彼女が強い口調で言つた。

「規約？ああ、あの意味もない？読み物？か。

あんなもの、所詮最後は大晦日のテレビ事情について質問する程度だろう？ぐだらない…」

最後の一言は、悲しいことに納得が行くのは僕だけだろうか。

「決まりよ、でも私がそれを黙つてさせるとでも？」

しかし謎の男は負けずと言い返す。

「邪魔をさせるとでも？」

僕には到底分らなかつたのだろうが、彼と彼女の間ではこれが開戦の合図だつたのだろう、

彼女が勢いよく持ち上げた右腕から、またしても一筋の光線が。しかしここで仰天。見ているだけで眼が焼けそうなその光線を、男は右の手のひらで甲高い音と共に受け止めたのだ。まるで吸收される様に消えたその光線を大内が恐怖の眼差しで眺めていた。

「主！少し下がつていてください！」

「させない」

彼女は金属質に肥大した右手を片方の手で支え、更に強力な放射を大村の方向へと放つた。

しかし間一髪、謎の男の差し出した左手に直撃、今度は男の体が大きく傾いた。そして更にもう一発。

彼女には本当に躊躇という言葉が無いようだ。そしてこれは男に致命的なダメージを与えた。

空気を焦がす光の筋は、男の左腕を肘から吹き飛ばしたのだった。

「つてええ！？」

目の前の光景に思わず大声を出した僕。大村は耐え切れずに氣絶した様子、泡を吹いて動かなくなってしまった。

「や、やりすぎですよ！」

僕の視線は後ろに仰け反り、後頭部から倒れた男のまま、右腕から排熱の蒸気を出している彼女に叫んだ。

「いいの、これくらいなら」

相変わらず冷淡な彼女。

しかしおかしいのは彼女だけでは無かつた。

男は倒れた反動を利用して復帰、鋭い視線を僕と彼女に向けながら、前方に、つまり僕達の方向へと跳躍した。

「ライバルって奴は、早めに潰しておくべきだよなア！」

何時の間にか、男は跪く僕の真上に来ていた。

振り上げた右手から、一瞬火花の様な光が見えた瞬間、男の姿は残像も残さず目の前から消え去った。いや、消し飛ばされたのだ。爆音がテンポ遅れで聞こえ、数メートル先に男が右腕から黒煙を上げて倒れていた。

「右腕もいらないのかしら」

彼女も同じく腕から排熱の煙を上げていたが、全く苦痛の無い表情だった。

「彼は…人間じゃないんですか？」

僕は思わず呟いた。

それは再び起き上った男に向けたのか、そしてトドメを刺す為に右腕のキヤノンから光が漏れ始めた彼女に向けて言つたのかはハツキリしなかつたのだが。

「悪いが、今日はここまでだ」

体のあちこちから火花を散らしながら腰に手を回した男は、睨み殺す様な視線で彼女をにらむと、右腕に持つた何かを思いつきり地面に叩きつけた。

次の瞬間、舞いあがる煙幕。

「うわっ、ゲホオッ！？」

何が起こったのか理解するのに数秒の時間を要したが、傍らの彼女が煙の中に向かって走つて行くのを確認して、僕はあの男は逃げたのだと悟つた。

「こんなのは、信じられない…」

今の僕には、ただ目の前で起つていた光景を否定するしかできなかつた。

「いいえ、現実よ」

いつの間にか煙は晴れ、元に戻つた右腕を垂らした彼女が僕に歩み寄りながら言つた。

「でも…あ、それより大村は！？彼は無事なのですか？」

「知らないわよ、ただ彼達を逃がした事だけは確かね」

「何か悪いことでも？」

その問いに、彼女は虚空を見ながら呟いた。

「…いずれ、解るわ」

「はい？」

彼女のその言葉を理解する前に、次の事態は起こってしまった。高速道路下の静けさを裂く様にして、一台のスポーツカーが僕たちの目の前に走りこんで来た。

「危ない！」

思わず後ずさりする僕、思わず先ほどの戦闘で作られたクレーターに足を取られそうになる。

「案外早かったのね」

彼女が全く動じないとこちらを見ると、彼女の仲間なのだろうか、いや、彼女のポーカーフェイスは本当に信じられないからなあ。流線型の車体に、深紅のボディ。そこらの車と比べたら溜息を漏らす程の出来栄えなのだろうが、今の僕はそれどころじゃなかつた。

「け、警察ですよ！」

遠くから徐々に大きくなつてくるサイレンは、きっとこの煙や火を見た人が通報したのを聞き付け、急がばとやって来たパトカーの音だろう。

別に悪い事をしたつもりはないけれど、なんとなく彼女といふと妙に罪悪感に捉われてしまふのは気のせいか。

いや、気のせいではないのだろう。

「逃げるわよ、早く乗つて」

そう、ある意味羨ましい程の冷淡さで、眼の前のスポーツカーを指さすものだから。

「に、逃げる…？」こんなの、事情を説明すれば…どうにもならないですよね！」

一人で疑問を投げかけ勝手に解決した僕は、彼女の言つがまま背を低くして革張りのシートに身を沈めた。

「…あれ？ そういえばこの車、一人乗りですよ？」

そこで気づく事実、この車は見ての通り一人乗り。運転席には既に

知らないサングラスをかけた男が座っているし、助手席に僕が座ると満員、彼女が座れない事は自然と解つてくる。しかし、

「もうちょっと深く座つて頂戴。頭がぶつかっちゃう

「は？」

彼女が僕のフトモモに片手を置き、そのまま乗り込もうとしてきた。

「ちょ、まつ！何してるんですか！？」

「乗ろうとしてるのよ」

「違います！あんていうの…その、あまりよくないですよ！」

「？対象の発汗量が30%増加？何があったの？」

彼女が僕のステータスらしき情報を言つている間にも、甲高いサイレンの音は徐々に近づいてきていた。

「ミコ、早く乗れよ、そしてお前、お前だよボウズ…お前、非人間相手に何興奮してんだ？」

「してません！ってちょっと！狭い狭い！」

横の男に気を取られている間に、彼女は流れ込む様に乗り込んでいた、柔らかい感触が色んな感覚を麻痺させそうだったけど、堪えて窓の外に視線を移す僕、そしてそこには、高速道を下に流れ込む様にして入ってきたパトカー数台。そしてその瞬間、前面から物凄い衝撃が僕を襲つた。

「シートベルト忘れるんじゃねーぞ！」

横のサングラス男が機嫌よさげに言い放つと、再び襲う衝撃。これは何かにぶつかったような感触だった。

「うわっ！？何をしたんですか…ツ！」

車内には轟くエンジンの爆音と、対向車が鳴らすクラクションで満ちていた。

そして弾かれた様に右に切られるハンドル。

不快な遠心力で体が浮きそうになる最中、僕の膝に乗つていた彼女が微妙に浮いたのが見え、焦つてしがみ付く様にして彼女を引き寄せた。

「うわあああっ！」

その行為が、結果的に自分の体をシートから離脱させる結果となってしまい、「ンマ数秒の内に不安定に浮いた体は重心を失い、そして。

(「ン」)

鈍い音と共に、僕は額から彼女の後頭部にヘッドアタック。

彼女が小さく「あ」と声を出したのを最後に、僕の意識は途切れた。

「和雄、何をしているの？」

声が、聞こえた。

僕の意識は、深い、深いまどろみと白い光の中にあった。  
ここはどこ、というより、どの場面なのだろうか。  
どこかで見たことがある、しかし、全く思い出せない。  
僕に声をかけた女性はどこかで聞き覚えのある声だった。  
そうだ、この声は。

「母さま、どうしてあの男の人達は路地裏で？おしくらまんじゅう  
？をしているの？」

僕が見ていた光景、それは暗く汚らしい路地裏で一人に対し4人の  
男が足や手を使つて？おしくらまんじゅう？をしている姿だった。  
光の中にただ一つ存在する闇を見る僕の母は、  
無感情の声で僕に言った。

「あれはね、転校生を歓迎しているのよ」

「じゃああれは？」

場面は変わり、公園の前。

夕日差し込む団地の公園で、桜の木から伸びるロープに？ぶら下が  
つた？人を僕と母は見ていた。

「あれはね、？身長を伸ばそうと？  
声は途切れ、一面真っ暗やみに。

先ほどまで目の前で起きていた事は、まるで嘘の様に全ての映像  
が途切れた。

そして心細くなつた僕の心に、染み渡るような声が聞こえた。

「世界が、欲しくない？」

僕は即答できそつだつた。

しかし

「…？」

声が、出なかつた。

「世界が欲しくない？この世界が、あなたのモノになるのよ」  
目的も、意味も分らないはずのその台詞は、何故か僕の脳内を刺激するものがあつた。

「世界が」

「いらない！こんな世界なんて、いるもんか！」

誰かの声が聞こえた。しかし、それは正しく僕自身の声。  
まるで僕の代役を務めてくれたかの様なその声は、僕の思つている事を忠実に暗闇に響かせてくれた。  
そして暗闇は意思を持つてゐるかの様に、一瞬ためらいの無音を發して、そして言った。

「じゃあ、変えてみれば？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6976e/>

---

Fiction World

2010年10月28日07時38分発行